

「その日」はなかなか訪れない。覚悟はしていたとはいえ、やはりすっきりしない毎日を過ごしている。議員連盟としての要綱案の確定の後、各党での合意形成の作業は、思いがけない反応や対応に苦慮しつつ、やっと見通しが立つ段階に入りつつある。5・9に市川で開かれた法制化記念集会は、残念ながら「祈念」の場となったが、1,000人を越える人々が参集し、一層「一刻も早く」の熱を帯びた。次号の本誌が発刊される頃には、法制化の趨勢は決しているだろう。「祈念」と共に最後の努力に傾注する5月の決戦期にしたい。

しかし、協同労働は言葉としても事実としても、既に認知を大きく広げている。鳩山政権が普天間問題をはじめとして苦境に立つ中、強く打ち出されている「新しい公共」を巡るフォーラムが4/25に開かれ、永戸理事長が報告者として参加した。まだまだ「新しい公共」を巡る課題や展望は定まりきっていない中で、「市民が主体」という確信点は、その実像がどんな姿なのかを示されることで、具体的な政策として確立していこう。協同労働という働き方と、その協同組合が法制化される時代と、新しい公共は重なりを一層広げ、新しい地域と社会を生み出す、新しい時代を拓いていくと信じたい。

5月は、緊急ケアワーカー集会で介護保険制度改正への提言を深め、食のよい仕事コンテストで、弁当の日の実践から「自治

と連帯の基礎」としての食・事業を本格化させ、そして6月の総会・総代会を迎える。議案づくりも、法制化を既成の事実とし、中長期の展望を共有する内容で議論が始まった。とりわけ今回の総会・総代会は、「新時代の労働政策」を定める。その中心は、「完全就労社会の実現」を公共的課題の中心に据え、そこから社会政策を市民が練り上げる運動を呼びかけるものだ。

その意味で、「反失業・仕事おこしネットワーク」を広げ、「協同労働 相談・支援センター」を各地で開設し、「職業訓練」を通じて仲間とスキルを充実させ、雇用対策に関する政策・事業も活用しながら、失業者と地域が主体になった「仕事おこし」を本格化させるという実践が、文字通り「新しい公共」作りの中心的な実践課題として始まっている事実を、もっと早く、さらに広く進める必要性を痛感する。各地の総会も、「法制化時代」を中心に据えた、新しい水準のものにしていく努力がはじまった。

時代が激しく揺れ動き、社会が根本的な地殻変動を起こし始める中で、自分たちの存在と価値、そして未来の展望・ビジョンが、今ほど求められる時はない。激しい時代の中でしっかりと立ち、一步一步を踏みしめつつ、新しい歴史を始める契機としての総会・総代会の成功に尽くしたい。2012年は国際協同組合理年。その実行委員会も立ち上がる。今秋の全国協同集会も、「協同組合の復権」が大きなテーマに浮上する。

今一度、「協同組合」というものを深め、「協同の時代」を拓く特別の使命と役割自らに

課し、悔いの残らないよう今を生きていきたい。先人たちの無念をいつも抱きながら。

## 研究所だより

榎本 木綿

先日、警察庁の2009年度自殺統計が出され、前年度より1.8%増加、12年連続で3万人を超したことが発表されました。なかでも若い世代の20代～30代の自殺率が前年度に続き増加し、自殺動機のトップは「健康問題」(1万5,867名)、そのうち「うつ病の影響・悩み」がおよそ44%(6,949名)を占め、また、動機に「失業」が含まれた割合は前年比で7割近く増加したそうです。

かつては「失業」というと中高年のイメージが強くありましたが、いうまでもなくいまや若年層を取り巻く正規就労への困難さは増す一方です。非正規や派遣で働く若者は、容易に解雇対象とされる環境のなかで怯え、解雇されることを繰り返すうちに自己不全感を増し、うつ病などを発病させることも少なくありません。また、正規労働者もリストラにより縮小された職場機能を埋めるべく、仕事量や責任が増され、自殺に追い込まれるケースもしばしばです。

先日開かれた千葉縣市川の集会では「協同労働の協同組合」法制化をめざす市民、一千余名が一堂に会し、なぜこの法が必要なのかを訴えました。正規労働者として働きながらも過酷な労働の現場からうつを発病し、辞職。その後、ワーカーズコープがさいたま市から受託、開催した若者職業的自立講習へ参加し、現在は健康を取り戻し

ながら、同じようにやむを得ず失業や派遣切りなどに遭った他の受講生たちと共に、皆が共に働け、集えるコミュニティ喫茶の設立に向けて奮闘中という女性のお話や、不登校やひきこもりの子どもたちの親の会を発端に、障がいを持つ人たちなども含めたハンディを持つ人たちが一緒に働ける場を作っているワーカーズ・コレクティブの方などが自分たちの取組み報告を通じて、その思いを訴えました。

また、同日行われたトークセッションでは笹森清市民会議会長がコーディネーターを務められ、福嶋浩彦さん(中央学院大学、協同総研理事)と湯浅誠さん(反-貧困ネットワーク事務局長)が登壇され、そのなかで「新しい公共」の担い手として「協同労働」という新しい働き方への期待を強く語られました。特に福嶋さんからは、「新しい公共」の担い手が従来の単なる公からの事業の下請けではなく質を問われるものであることなどが挙げられ、現在の雇用破壊の防波堤として「協同労働」への期待が力強く語られ、会場全体が法制化への熱い想いを共有した場となったことが印象的でした。

鳩山政権がすすめる「新しい公共」では、官が担ってきたまちづくりを地域に暮らす人たちがボランティアに担うことで地域に暮らす人々の幸福感が増すということを訴